国際経営・文化研究　Vol.12 No.2　March 2008

（論　文）

パウロ・コエーリョの世界観

田 中 耕 一 朗

キーワード

パウロ・コエーリョ　　世界観　　子ども　　生き直し　　夢

序論

パウロ・コエーリョは現在、世界で最も広く読まれている作家の一人である。著書の販売総数はおよそ１億冊と言われ、2005年に出版された『ザーヒル』も既に50の言語に翻訳されて様々な文化背景の人々に受け入れられている[1]。しかし日本においては、非常に多くの読者がいるにもかかわらず、彼の文学に関する研究はこれまでのところ皆無に等しい。

本論文の目的は、コエーリョの書いた小説を概観し、彼がその創作において何を目指しているのかを明らかにすることである。そこでは自ずと、コエーリョが世界をどのように捉え、その中に人間の生をどう位置づけているか論じてゆくこととなるだろう。表題の「世界観」とはそのような意味である。

第１章　パウロ・コエーリョについて

第１節　経歴[2]

パウロ・コエーリョは1947年、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ郊外の中流家庭に生まれた。規律の厳しいイエズス会の学校で、彼は作家になることを夢見、次第に反抗的な態度をとるようになる。そのため心配した親によって幾度か精神病院へ入れられている。

コエーリョは高校を出ると新聞に記事を書きながら演劇の分野で活動を始める。やがて世界的なヒッピー時代の大波に巻き込まれて、政治運動や哲学論議からドラッグに至るまで様々なことを経験する。またこの時期に米大陸を旅行している。一旦は大学に入るが続かずハウル・セイシャス[3]との出会いをきっかけに作詞家となり、成功して大金を稼ぐ。しかし黒魔術に傾倒する一方で反体制的な活動に関わっていたため、当時の独裁政権下で彼は逮捕され、続く準軍事組織による監禁・拷問によって心に深い傷を負う。その後しばらくの間レコード会社で働くが、再びヨーロッパへと旅に出る。

ドイツのダッハウで内面的な気づきを得たコエーリョは、カトリックの信仰へと立ち返り1986年スペイン北部の巡礼路“サンチアゴへの道”を歩く。これが転換点となり、翌年そ

たなか　こういちろう：淑徳大学大学院　国際経営・文化研究科２年

の経験をまとめて『星の巡礼』を書き、彼は新たな人生をスタートさせることとなる。1988年に出した『アルケミスト』が世界的なベストセラーとなったことで作家としての地位を固め、以後はほぼ2年に1冊のペースで小説を発表している。

これまでにコエーリョは世界各国で数々の文学賞を受賞しており、2002年には母国のブラジル文学アカデミーに入会を認められた。印税収入を得られるようになってからは社会貢献にも積極的で、個人的に組織を立ち上げてブラジル国内の助けが必要な子どもや老人を支援したり、ユネスコやアムネスティ・インターナショナルなどの活動にも携わっている。また2007年には国連平和大使として任命されている。

第2節　作品

1987年から2006年にかけて、パウロ・コエーリョの著作の中心は小説である[(4)]。小説以外の著作としては5冊の短編集[(5)]と2冊の翻案が挙げられ、その他に新聞や雑誌に多くの文章を書いている。本論文ではそのうち2005年以前の小説9編に絞って論じてゆくこととする。

コエーリョの小説に共通する特徴としては、まず文章が簡潔で平明であることが挙げられる。これには彼の出自と経歴が少なからぬ影響を与えていると思われる。つまり、歴史的に文学が一部の限られた人々のものであり、テレビの力が活字文化を圧倒しているというブラジルの国内事情が、彼の読み易い文体の背景にはある。更にそこに作詞家としての経験が加わっていることは作者本人も認めるところである。歯切れのよい明快な語り口は作品にリズムを与え、読者を力強く物語へ引き込む効果を持っている。

コエーリョ作品のもう一つの特徴は、テーマの普遍性である。物語の舞台がスペイン、フランス、エジプト、アメリカ、フェニキア、スロベニア、スイスなど実に多様であることも、その一つの反映であろう[(6)]。彼の関心はどこか一つの土地に結びついたものではなく、人生の意味や愛、夢、神、性といった人間の内面に深く関わるものである。そのようなテーマを真正面から語ろうとする彼の小説が、幅広い層の読者の共感を集めるのは自然なことである。

「パウロ・コエーリョは作家を超えた存在である[(7)]」という評価はよく聞かれるが、彼の小説は読者に内省を促し、その実人生に働きかける力を持っているように見える。その理由については本論文の中心テーマとなるので、第3章において改めて考察してみたい。

第2章　パウロ・コエーリョの小説

この章では節を設けず、コエーリョの小説9篇に関する基本情報（原典とその初出年、邦訳の有無）と梗概を示し、それに作品理解の助けになると思われる事柄を幾つか付記してみたい。

2　"O Diário de um Mago" [(8)], 1987

邦訳：『星の巡礼』山川紘矢・亜希子訳[(9)]、地湧社、1995年[(10)]

梗概：主人公のパウロは神秘主義の秘密結社に所属しているが、試験に失敗して師から巡礼の道を歩くよう命じられる。彼はその巡礼行を通して、力の象徴である剣を探し出さなければならない。パウロは、ペトラスという名のガイドと道を進む中で様々な気づきを得て、少しずつ変化してゆく。通り過ぎる場所には彼が学ぶべきレッスンがあり、時に危険な、時に喜びに満ちた、時には超自然的な体験を経て、彼は自身と世界

に対する理解を深め、勇気と直感力を磨いてゆく。そして最後には、力（剣）は何かを本当に実現しようとする人に等しく与えられるものであることを知り、彼の望みのある場所に剣を見出す。

各章末には主人公の行った実習[11]マニュアルが付いていてユニークな体裁となっている。

付記：前述の通り作者の実体験（出版前年の巡礼行）を下敷きにした小説である。魔術や神秘的事象、奇跡といった題材はコエーリョ作品では頻繁に扱われるが、彼は決してファンタジーを描いているわけではない。それは世界の別の側面であり、科学が十分に扱うことのできなかったものである[12]。

“O Alquimista”, 1988

邦訳：『アルケミスト』山川紘矢・亜希子訳、地湧社、1994年

梗概：主人公はスペインのアンダルシア地方で羊飼いをしている少年である。サンチアゴという名のその少年は、ある時ピラミッドに行けば宝物を手に入れられると告げる夢を続けて見る。セイラムの王メルキゼデックに励まされて、彼は羊を売り、ピラミッドを目指して旅に出る。行く手には盗人、安定した生活への誘惑、砂漠やそこに住む部族同士の抗争など幾多の障害が横たわっているが、彼はそれらを克服しながら旅を続ける。また生涯の伴侶となる女性との出会いや、不思議な力を持つ錬金術師の出現なども彼を待ち受けている。少年は前進することでより強く、より賢くなってゆき、生きることの意味を見出して、最後には宝物へと辿り着く。

付記：コエーリョの出世作であり、今でも着実に読者を増やし続けている大ベストセラーである。66の言語に翻訳され、全世界でおよそ3000万冊が売れている[13]。

“Brida”, 1990

邦訳：なし

付記：ポルトガル語版・英語版とも一度絶版になっており入手することができなかった[14]。公式ホームページなどで概略と冒頭部分のみ読むことができ、また作者も作品の背景について幾つかコメントしているので、本論文では第３章で少しだけ触れることとする。

“As Valkírias”, 1992

邦訳：なし

梗概：小説『アルケミスト』を書き上げたパウロは、師であるＪから、アメリカのモハーヴェ砂漠へ行き天使と話をするという課題を与えられる。パウロは妻のクリス[15]と現地へ赴き、天使と対面したことのあるジーンという青年と会う。ジーンはクリスに魔術について教えパウロを導こうとするが、既に魔術に通じているパウロには天使と言葉を交わすことは容易すぎ、それゆえ彼は天使を“見る”ことにこだわるようになる。彼らは更にヴァルキリー[16]と呼ばれる女性たちと接触し、そのことでクリスは飛躍的な成長を遂げ、パウロも心の奥底に沈めていた束縛から解放される。また二人は自分たちの結婚生活についても振り返り、互いの心性[17]をよりよく理解して関係を新たにする。そして40日[18]に及ぶ探求を経て、パウロは自分の天使と出会う。

付記：『星の巡礼』に続いて作者自身に近い人物が主人公として登場し、自伝色の濃い作

3

品である。しかし前作が一人称の語りであったのに対し、本作は三人称の主人公たちで、パウロと同じくらい細やかな描写がクリスの感情や思考についてもなされている。

“No margem do rio Piedra eu sentei e chorei ”, 1994

邦訳：『ピエドラ川のほとりで私は泣いた』[19] 山川紘矢・亜希子訳、地湧社、1995年

梗概：スペインのサラゴサで学生をしているピラールは、安定した仕事と平凡な結婚を求めている。ところがある日、彼女は幼なじみの講演会に招かれる。12年ぶりに再会した彼は修道士となっているが、彼の語るのは「我々が胸の中にずっと抱いてきた子ども[20]」や「神の女性の顔[21]」といった奇妙なことばかりであった。ピラールは彼に請われてマドリードからビルバオ、遂には彼の修道院があるピレネーの山中まで一緒に旅をすることとなる。その道中で彼女は不安や怖れを押しやって、隠していた彼への愛を甦らせる。一方で彼も、啓示によって与えられた使命とピラールへの愛との間で悩むが、彼女と共に生きることを選ぶ。彼と受難を分かち合う覚悟を固めていたピラールは、その決断により彼が使命を捨てたことに一旦は打ちのめされるが、すべてを受け入れて新しく二人の道を歩み始める。

付記：タイトルが聖書の詩篇137篇[22] を下地としているのは明らかで、作中にも同詩の引用が二度現われる[23]。

“O Monte Cinco”, 1996

邦訳：『第五の山』山川紘矢・亜希子訳、地湧社、1998年

梗概：旧約聖書の預言者エリヤが主人公。イスラエルのギレアデで指物師をしていたエリヤは、ある日神の啓示を受ける。それは当時の王アハブが隣国フェニキアから王妃を迎えて異教の神を敬うようになったため、神がイスラエルに旱魃をもたらすというものであった。エリヤはこれを王に伝えるが、そのことで王妃イゼベルの不興を買い、命を狙われることとなる。

　砂漠へ逃れたエリヤは再び神の啓示を受け、フェニキアのアクバルへと赴く。そこで彼はやもめ女に助けられ、彼女の息子を死の国から連れ戻したことによって知事の相談役の地位を得る。ところがやがてアクバルはアッシリア軍の侵略を受け、町は崩壊し、彼が愛するようになったやもめ女も命を落とす。エリヤは神の酷い仕打ちに抗議の声を上げ、やもめ女の息子と共に町の再建に立ち上がる。一旦は神と決別したエリヤであったが、アクバルの町が蘇った時に神の意図を知り、自分の使命へと戻ってゆく。

付記：『第五の山』は前作『ピエドラ』と鮮やかな対照をなして構成されている。作品の舞台（旧約聖書の時代／新約以後の現代）、主人公の性別、描かれる神の姿（命令し挑む男性的な神／受容と愛を象徴する聖母マリア）、啓示を受けた者の態度（全面服従＝受動的／使命の拒否＝能動的）など多くの点が指摘できる。その中で優れて印象的で大きな効果を挙げているのが、作品の基調となっている火と水である。『第五の山』においては旱魃に始まりケリテ川の消失、天から火が降るという第五の山、燃えさかる天使の剣、戦火、そして慣習に背いて行われる火葬。一方『ピエドラ』においては川辺での語りから霧、噴水、降り続く雨、山岳地方特有の靄、井戸、高地に残る雪、ルルドの泉、滝、池、そして涙と、一貫して湿度の感じられる世界である。神の

4

二つの側面を象徴するこのようなコントラストが、最終的には『第五の山』のエピローグ、エリヤが供物を焼いて大雨を呼ぶ奇跡の描写に至って見事に合一を果たしている。

“Veronika Decide Morrer”, 1998

邦訳：『ベロニカは死ぬことにした』[24] 江口研一訳[25]、角川書店、2001年

梗概：舞台はスロベニアのリュブリャナ。24歳のベロニカは容姿と知性に恵まれ、家族の愛も安定した仕事も手にしていた。しかし彼女は新味のない毎日の繰り返しに倦み、やがて醜く老いて手遅れになる前に人生を終わらせようと決意する。

睡眠薬による自殺を試みたベロニカであったが、死ぬことができずヴィレットと呼ばれる精神病院に送り込まれる。そこは精神病患者と共に、様々な事情から外の世界との関わりを断った人々が暮らす奇妙な場所であった。幽体離脱のできるゼドカ、精神病への偏見から帰る場所を失ったマリー、親の愛によって夢を捨てざるをえなかったエドアードらと彼女は出会う。

ベロニカは医師から、彼女の心臓が致命傷を負っており一週間しか生きられないと宣告される。そのことが彼女の内に変化を呼び起こす。はじめは死と向き合うことを避けていたベロニカであったが、恐怖を認め、抑えていた感情の表出を経て、残された数日を精一杯生きてみたいという欲求が彼女の心に芽生える。彼女はそれまでは周囲を気にしてできなかったことにあえて挑戦し、強烈な感情を経験して、生の意味を理解するようになる。彼女のそのような生き方に触発されてヴィレットの住人たちも少しずつ変わり始める。

付記：本作では死がベロニカの気づきの契機となっているが、既に『星の巡礼』『アルケミスト』の頃からコエーリョは作中で幾度も、死の自覚が生を捉え直す上で大きな役割を果たすことに触れている。

“O Demônio e a Srta. Prym”, 2000

邦訳：『悪魔とプリン嬢』[26] 旦敬介訳[27]、角川書店、2002年

梗概：ヴィスコスは、かつて栄えたが今は子どものいない過疎の田舎町である。その町で最も若いのがシャンタール・プリンで、彼女は身よりもなく、ホテルのバーで働きながら倹しい生活を送っている。ある日その町に一人の異邦人がやって来る。彼はシャンタールに「もし一週間以内に人が一人死ねば金塊を町に与える」と人々に伝えるよう頼む。それは町の全員が何世代も安穏と暮らせるほどの大金であった。

はじめは拒絶したシャンタールも、心密かに持っていた不満を自覚し、遂には異邦人のメッセージを人々へ伝える。彼女は臆病な町の人々が殺人など犯せるはずがないと考えるが、意に反して人々の間には、夫に先立たれた老婆ベルタを犠牲にして町を再建しようとする動きが出てくる。ベルタとの会話や異邦人との対決、何より内なる葛藤と苦悩を経て、シャンタールは自らをより深く理解するようになる。彼女は辛うじて町の人々に自制心を取り戻させることに成功し[28] 望み通り大金を得て町を出てゆく。

付記：作者自身が語るように、この小説は『ピエドラ』『ベロニカ』と合わせて“そして七日目には”三部作を構成する。三作はいずれも若い女性が主人公で、七日間という短い期間に彼女たちがそれまでの自分の生き方を見つめ直し、試練を乗り越えて大き

な変化を遂げる物語である。

“Onze Minutos”, 2003

邦訳：『11分間』旦敬介訳、角川書店、2004年

梗概：ブラジルの田舎町で育ったマリアは、冒険を求めて海を渡りスイスのジュネーヴで暮らし始める。ところがダンサーとしての仕事は早々に解雇されてしまい、生活費が底をつきかけた時に、彼女は娼婦の仕事と出会う。マリアはその仕事を通して未知の自分を発見し、以前よりも自由に行動できるようになる。

二人の男、ラルフとテレンスが彼女の前に現われ、マリアは更に深く自分自身を見つめる。テレンスとのサドマゾヒズムの関係を退けた後で、彼女は売春がいかに自分の望みとかけ離れたものであるかを悟り、帰国を決心する。マリアはラルフとの関係をかけがえのないものと感じてはいるが、互いの自由を束縛すればそれは壊れてしまうと考え、彼の元を去ろうとする。しかしラルフは彼女を飛行場で捉まえて、二人は新たな冒険へと足を踏み出す。

物語の合間にマリアの日記が効果的に挿入されている。それによって読者は主人公に共感を抱きやすくなり、同時に彼女の気づきや発見を分かち合うことができる。

付記：この作品は多くの取材に基づいており、これまでのコエーリョ作品にはあまり見られなかった嗅覚や聴覚、触覚に関わる繊細な描写が散見できる。

また興味深いのは、マリアのリオ・デ・ジャネイロ滞在が一週間である点である。国を出るまでの彼女の物語は、明らかに“そして七日目には”三部作を踏襲している[29]。

第3章　パウロ・コエーリョの世界観

パウロ・コエーリョは自身を“magus”と呼んでいる[30]。“magus”とは、古代ペルシアの祭司を指す語に由来して、普通は魔術を行う知恵或いは力を持つ者と解される。しかしコエーリョはそれを定義し直して、真の“magus”を「物事を隠された状態から明るみに引き出そうとする人[31]」であるとし、その力をどのように用いるかという点に強調を置く。彼によると“magus”の役割は「力を持つ者が隠し続けようとしていることを暴く[32]」ことに他ならない。彼は、例えば現代社会では多くの情報を操作する者がより多くの力を得ていることを挙げて、歴史的に力が少数の人々によって独占されてきた事実を指摘する。一方で大多数の人は欺かれて、力から遠ざけられているというのである。

彼の世界観の外郭は以下のように図式化できる。

6

	＜子ども＞[33]	＜大人＞	＜生き直し＞
世界との関係	世界をあるがままに見ている	＜偽りの物語＞を信じている	世界の真の姿を再び見始める＝神秘・奇跡
自己の内面	自分の望みをはっきりと知っている	＜他者＞の命じるところを生きている	自分の望みを思い出す

⇕

力を握っている人々
力を志向する人々

人生の早い時期には「すべてが明白で、すべてが可能である[34]」とコエーリョは書いている。それは先入観なく世界を見ている時期であり、人生に対して夢や希望を持ち、怖れを感じていない＜子ども＞の時代である。これは成長段階というよりも心の状態と考えられる。例えば彼は自身の著作について、我々の理性よりも「すべての人が心の中に抱いている子どもの方が私の本からずっと多くのことを読み取っている[35]」と語っている。＜子ども＞とは、可能性を信じて自分の望みを追及しようとする心を表すものである。

これに対して＜大人＞は、周囲から様々なことを語り聞かされることによって、もはや自分の可能性を信じられなくなった心を表す。そのような周囲の声は時に“現実”の名のもとに正当化され、人に対して大きな影響力を持つ。語り聞かされたことを信じるようになるにつれ、人は徐々に自分の目で世界を見なくなる。そして人は自分自身の可能性を放棄してしまうのである。

自分自身の判断を経ず聞かされるままに信じられている事柄を、コエーリョは＜偽りの物語＞と呼ぶ。それは人が望み通りに生きることを妨げる。しかし多くの人は＜偽りの物語＞をあまりに強く信じているため、それがあたかも自分自身の考えであるかのように錯覚している。各人の心の中に巣食ったそのような声を、コエーリョは＜他者＞と呼ぶ。

＜大人＞は自分の望みを忘れ可能性を否定することによって力を奪われている、というのがコエーリョの重要な指摘である。＜偽りの物語＞が蔓延しているのはそのためである。とはいえ、そこに囚われない人々も少数ではあるがもちろん存在し、他方では力を志向しそれを手に入れようとしている人々もいる。

＜生き直し＞はコエーリョの創作の大きなテーマである。彼は＜大人＞の状態にある人も心の奥底には＜子ども＞を隠し持っていると考えている。その＜子ども＞が目を覚ませば、彼らは再び自らの目で世界を眺め、そこに美しさや意味を見出すようになる。彼らが＜生き直し＞に転じるためには＜偽りの物語＞に気づく必要がある。実のところ『アルケミスト』を除いてコエーリョの小説はすべて、この＜大人＞から＜生き直し＞への過程の中に位置づけることができる。

その意味で、コエーリョの創作はまさしく“magus”の仕事である。彼は物語を書くことによって、生の根本に関わる諸々の事柄について、多くの人が語り聞かされるままに信じてきた＜偽りの物語＞を暴き、その真実の姿を明らかにしようとしている。それはまた、人々に本来彼らが持っている力を取り戻させようとする試みである。

ここからは、彼の作品を年代順に追いながら上述の事柄を検証し、コエーリョの創作の企図を明らかにしてみたい。

第１節　『星の巡礼』：可能性の扉

『星の巡礼』は力をめぐる物語である。その道行きは同時に、読者が力の所在に気づく旅でもある。

7

旅のはじめ、パウロは巡礼の素朴さに少なからぬ抵抗感を抱く。それ以前の彼の探求は神秘や奇跡に彩られており、彼はそれらに深く魅了されていたからである。そのような複雑で観念的な経験は、彼の心に他の人々に対する優越感を芽生えさせた。そして、それが実は彼の躓きの石となったのである。

「力を与える[36]」とされる巡礼路が、誰でも歩くことのできる道として万人に開かれていることは象徴的である。長く困難な探求を経なければ力は得られないという考え自体が偽り

であることを、作者は主にペトラスの口を借りて示そうとする。彼はパウロに実習を教えるが、それらは何ら特別なものではなく「すべて誰にでも実践できるようにされている[37]」と断言される。

巡礼を通してパウロが理解するのは、誰もが力を手にできるという事実である。力は、それ自体が目的とされるべきではなく、飽くまでも人間の望みを実現するためにある。道中パウロが剣を求めることに集中しすぎて周囲への関心を失う度に、彼が試練に見舞われるのはそのためである。例えば彼は実習に没頭してしまい何日も気づかずに同じ道を歩くが、そのような失敗を重ねながら、彼は分析と論理に偏っていた自分を省み、直感を磨き始める。直感こそが自分の本当の望みを見つける指針となるからである。彼が剣を得るためには、歩き回ったり修行したりすることよりも先に、剣を用いて何をなすか、自分が何を欲しているのかを知る必要があったのだ。

ここにおいて作者は、力というものに対する一つの固定観念を逆転させる。力を手にした者が何かを（或いはすべてを）なしうるという＜偽りの物語＞は覆され、何かをなしたいと真に望む者にこそ力は与えられるということを、この物語は明かしているのである。

第２節 『アルケミスト』：生きるということ

『星の巡礼』は＜大人＞に対する第一声と見ることができる。それは、誰でも自分の望みを生きようとする者には力が与えられることを宣言し、＜生き直し＞の可能性を開示している。しかし、そこからはすぐに一つの問い、つまり“自分の望みを生きるとはどういうことか”という問いが浮かび上がる。それに対して最も素朴な形で答えるのが次作『アルケミスト』である。

『アルケミスト』は彼の９編の長編作品の中で唯一子どもを主人公とした物語である。これ以降の作品が全て成人を主人公に据えて、彼らが内なる＜子ども＞とどのように向き合ってゆくかを描いている側面のあることを考えると、この『アルケミスト』はそのような複雑さのない純粋な＜子ども＞の物語、すなわち寓話として読まれるべきであろう。

主人公の少年サンチアゴは、先入観なく物事を見る柔軟さと謙虚さを備えており、それゆえ旅を通して多くのことを学ぶ。彼は夢を追求する若々しい情熱に溢れているので＜偽りの物語＞を受け入れず、困難を乗り越えて前進を続けることができる。そのようなサンチアゴの冒険は、まさに自分の望みを生きる者の姿を体現している。

自分の望みはまた夢という名でも呼ばれる。夢は、現代にあっては多くの人が大切だと感じているにもかかわらず、現実よりも弱い存在だと信じられている。夢を実現させるには多くの困難が伴い、我々は大抵、夢と現実との折合いをつけて生きていかなければならないと考えている。それに対してコエーリョは、妥協せず夢を追求し続ける＜子ども＞を、まずはできるだけ純粋な形で提示したのである。

8 サンチアゴの旅にも数々の困難が立ち現われる。しかし彼はそれらを「精神と意志を準備させる[38]」試練として捉えて、逆境を克服してゆく。人生に対するそのような態度が遂には少年を最も深遠なる知恵へと導き、彼は巨大な力を手にする。

サンチアゴは自分の心の声を聞くようになり、それは「地上の人間には誰にも、その人を待っている宝物がある[39]」と告げる。ここで言う「宝物」とは、その人が価値を置くものを意味し、その人の夢或いは望みと言い換えることができるだろう。そして、宝物の探求こそが人間の運命であり、幸せへの道であるにもかかわらず、多くの人はその道を進もうとせ

ず、子どもの頃には大きく響いていた心の声も年を経るにつれ細く小さくなってゆくと言うのである。

その理由は「ほとんどの人は世界を恐ろしいものだと思っている[40]」ためである。失敗によって傷つくことを怖れるために、多くの人はリスクを冒そうとしない。ここで語られているのも＜偽りの物語＞の一つと見ることができるが、それに続く「そのため世界は現実に恐ろしいものとなる[41]」という言及は、作者が単なる理想論ではなく深い洞察に基づいて人生を捉えていることを示すものである。

そして作者は、もう一つ重要な発想の転換を行う。それは「夢を追求している時には、どの心も決して傷つくことはない[42]」という指摘である。サンチアゴが困難に直面しても苦悶しないのは、この物語が浅薄なファンタジーだからではない。これが＜子ども＞の物語だからである。幼児が歩くことを覚えるように、サンチアゴは何が起ころうともひたむきに足を前に運ぶ。そこには挫折も打算も、感傷も自己憐憫もない。

『アルケミスト』では夢を追求する過程を、ビギナーズ・ラックから前兆の存在、喜び、障害とその克服、そして学びと成長に至るまで、一つのモデルとして提示している。もちろんこれはフィクションではあるが、それでもこの物語が人の心（の中の＜子ども＞）に訴える力をもつことは、本書の世界的な成功が証明している。コエーリョは『アルケミスト』によって、人が信じるべき人生の物語を描いたのである。

第３節　“Brida”“As Valkírias”：作者自身の物語

『アルケミスト』の少年のように自分の望みを生きようとした時、一体どのようなことが人生には起こりうるのか、以後のコエーリョ作品はすべてそのヴァリエーションと見ることができる。人の望みはそれこそ人の数だけ多様であり、彼の仕事は取り上げる一人ひとりの人生を丁寧に描くことへと移ってゆく。

コエーリョが最初に主人公として選んだのは他ならぬ彼自身であった。“Brida”と“As Valkírias”は共に彼の個人的な経験を色濃く映した作品である。

“Brida”は、コエーリョがもう一つの巡礼を行った経験が下敷きとなっている。その巡礼は「女性性の道」或いは「ローマへの道[43]」と呼ばれており、彼はそれを「自分の人格における女性的な側面を明らかにする[44]」ために行ったと語っている[45]。

“As Valkírias”も彼にとって巡礼と同等の重みを持つ旅[46]を基にして書かれている。この小説で特徴的なのは、主人公が二人いる点である。一人は作者と多くの共通点を持つパウロであり、もう一人は彼の妻クリスである。

この物語は『星の巡礼』と様々な点で符合しており、その後日譚として読むことができる。『星の巡礼』で力を手に入れたパウロが、その後どのように生きたのかは読者が非常に興味のあるところであろう。“As Valkírias”は言わば、パウロの＜生き直し＞の物語である。

この作品でのパウロは飽くなき探求者であり、『アルケミスト』のサンチアゴのように自分の望みに向かって邁進する人物といった印象を読者に与える。しかし、彼の心が完全な＜子ども＞でないことは、物語の進行につれて明らかになってゆく。彼はある時点から探求を続けることができなくなっており、そのためにヴァルキリーと儀式を行うこととなる。そこで暴かれるのは彼自身も意識していなかった恐怖心である。そのうちの一つは、過去に犯した大きな過ちによって彼が自分を信じられなくなったことに由来していた。このように作者は、極めて個人的な部分まで登場人物の心を暴くことによって、読者の心の隠された部分

に触れようとする。

一方、もう一人の主人公であるクリスは、はじめこそパウロに同伴する形で旅に出たのであるが、次第に直感力を高めて自身の探求を始める。物語を通じてパウロとクリスは互いに多くの影響を与え合っており、やがてはそれが彼らの探求にとって決定的なものとなってゆく。＜生き直し＞において愛というものがどのような意味を持つのか、作者の創作テーマは一人の人間の探求から人間相互の関係へと広がりを見せている。

第4節　『ピエドラ川のほとりで私は泣いた』『第五の山』：神の二つの顔

“As Valkírias”は、コエーリョが自身の個人的体験を読者と分かち合うために小説化したものという側面が強かった。そのため、それは確かに示唆に富んだ作品ではあるが、何らかの偽りを暴くということにはさほど重点が置かれていないように見える。それに対して以降の作品では、ある程度テーマを絞って物語が語られてゆく(47)。それらはみな＜大人＞が何らかの契機を得て＜生き直し＞へと至る物語である(48)。

『アルケミスト』でコエーリョは＜子ども＞の姿を生き生きと描いて、＜大人＞に人生の可能性を示してみせた。次に彼が『ピエドラ』『第五の山』において試みるのは、その新しい人生観から神を再規定することである。自分の望みを生きようとする者にとって、神とは一体どのような存在なのか。

『ピエドラ』はコエーリョが初めて神を正面から扱った作品である。そこで語られる神の姿は、キリスト教を背景にしてはいるものの、既存のキリスト教の枠には収まらない。それは神の語られてこなかった側面であり、コエーリョはそれを足掛かりにして神との新しい関係を模索してゆく。

主人公のピラールが恋心を抱く幼なじみは、故郷を捨て世界を放浪した探求者である。彼は修道士となっても安住することなく、マリア崇拝を肯定する宗教革新運動に携わっている。彼の語る神は女性の顔を持つ。ピラールは彼に魅かれるまま共に旅に出て、それまで経験したことのない冒険の喜びを知る。この構造は“As Valkírias”のクリスに通じる。

一方ピラールはその道程で、冒険の持つ別の側面、すなわち困難や危険について度々人から警告を受ける。また彼女自身も心の内に自らを押しとどめようとする力を感じるが、幼なじみへの愛と探求の喜びとが彼女の足を未知の世界へと踏み込ませてゆく。彼女はそれまでの穏やかだが単調な生活に戻ることを拒み、愛が「常に私たちをどこかへ運んでいく(49)」ものであることを理解して変化を受け入れようとする。

そして実は、探求の道を前にしてのこのような態度が、神の女性性に関わるものであることが次第に明らかになる。神の女性性は聖母マリアに象徴される。彼女は苦難に満ちた運命を受容した人物として、人々に勇気という恵みを与える。この勇気こそ、神の女性性の発露である。それは人を自分の望みの実現に向けて後押しする力である。この力を受けて自分の望みと対峙し、運命へと自分を手放すことは、人生を味わい尽くすことを意味する。

ピラールはこの神の女性性に触れて、決然と探求の道へ歩み入る。自分の望みを生き始めた彼女の心では、不安よりも喜びが勝り、苦難の予感にも「このような苦難が傷を与えることはない(50)」と思う。これは『アルケミスト』にも見られる＜子ども＞の態度である。

自分の本当の望みを見出すことについては、幼なじみがピラールに有効な実習を教えている。それは一時的にいつもの自分を脇によけ、なりたい自分を無条件にイメージしてみると

いうものである。ピラールは旅先の解放感も手伝って、自分を二つに分離することに成功する。一人は自分の真の望みであり、もう一人は＜他者＞と呼ばれる、世の中をうまく渡ってゆけるよう彼女の感情をコントロールしてきた存在である。彼女は、＜他者＞が命じる通りに生きてきたそれまでの人生が、確かに危険は少なかったが同時に喜びももたらさなかったことに気づく。それは彼女の真に望んだ人生ではなく、家族や友人、世間に認めてもらうための人生だったからである。作者はこのようにピラールの心の中に、意識すらされず＜偽りの物語＞が隠されていたことを暴いてみせる。

更に作者は、リスクを避けて安定した生活を求めることが人を神から遠ざけてきたことを示唆する。ピラールは＜他者＞を押しのけ、幼なじみへの愛を自分に許し始める中で、祈ることを思い出す。思春期に信仰から離れていたピラールは、再び神の存在を信じられるようになり「子どものように[51]」祈る。

自分の望みを生きる＜子ども＞は、最も素朴な形での信仰を持っている。それは、望みに従って生きればそれでよいという、世界に対する全幅の信頼である。自分の本当の望みを生きることが、このようにして神と人間との関係を修復してゆくことをコエーリョは包まず描き出している。

『第五の山』は、神のもう一つの顔を描いた物語である。自分の望みを生きようとする者にとって、神の女性性が背を押す追い風だとすると、男性性は向かい風に喩えることができる。それはピラールが予感した苦難であり、不条理と感じられるような悲劇的な出来事、人生の障害となりうる強い力である。

主人公のエリヤは預言者として神に選ばれた人物であるが、作中数々の苦難が彼の上に降りかかる。故国からの追放、イスラエルにおける預言者たちへの迫害、異国での亡命生活、戦争、愛する女の死など、それらはどれも彼の理解を超える出来事であった。

ところが畏怖の念から神に盲従するエリヤは、一度も自分で運命を選ばない。アクバルの町に戦火が迫った時に、彼はそれを回避する術を知りながら決断を下さなかった。また町を逃げ出す最後のチャンスにも彼は無為であった。その結果、彼は愛する女を失い、アクバルの壊滅に立ち会うこととなる。エリヤはそこに至って初めて神に対して怒り、抗議を叫び、自らの道を歩き始める決意をする。

エリヤの神は挑む神である。それは容赦なく破壊する。しかし、神に訣別を言い渡し人生に受動的であることをやめたエリヤが、覚悟を持って町の再建に乗り出した時、悲劇にしか見えなかった出来事は、少しずつ意味を持つ出来事へと変容してゆく。

『第五の山』によって作者は、悲劇的な出来事が理不尽な苦しみしかもたらさないという＜偽りの物語＞を覆す。それは不可避で、確かに人間の目には不条理に映り、多くの場合苦しみをもたらす。しかし彼は、その背後に神の男性性を見る。それは人間の探求を妨げるものではなく、『アルケミスト』でも語られているように「精神と意志を準備させる[52]」ものなのである。

神の二つの顔は、人が自分の望みを生きようとする時に現われる二つの強大な力と見ることができる。それは人間の意図を超えたところで働いているが、いずれも人間と敵対するものではない。神の女性性は人間を養い育て、男性性は打ち鍛える。コエーリョはそれらを共に人生の重要な一部とみなしている。

第５節　『ベロニカは死ぬことにした』『悪魔とプリン嬢』『11分間』：狂気、善悪、性、金

この三作において、コエーリョは物語の主人公をのっぴきならない状況に置くことで、彼女たちの人生における＜偽りの物語＞をあぶり出し＜生き直し＞へと向かわせる。

『ベロニカは死ぬことにした』の最大のテーマは狂気である。それは主人公に自殺を試みさせ、彼女を精神病院へと送り込んだ。

それまでのベロニカは、安定という理由から好きではない公務員の仕事をし、将来にも希望を見出せない典型的な＜大人＞であった。そこに狂気が現われて、彼女に人生を終わらせることを選ばせた。それはベロニカが自分の人生のありきたりさに絶望したためである。彼女の人生は＜他者＞のものであり、彼女はそこに喜びを見出せなかったのだ。

自殺を図った理由についてベロニカは「嫌いな人を殺そうと思った[53]」と漏らしている。「嫌いな人」とは自分自身について言った言葉だが、正確にはそれは彼女の中の＜他者＞の存在を指していると考えられる。彼女は更に続けて「自分の中に別のベロニカが存在してるなんて知らなかった[54]」と語っており、そのもう一人を「愛することのできるベロニカ[55]」と呼んでいる。こちらは彼女の＜子ども＞の部分と見ることができるだろう。彼女は『ピエドラ』のピラールと同様に＜他者＞とは異なる自分を見出すことで、大きな意識の変容を経験することとなる[56]。

隠れていた「別のベロニカ」は、精神病院の中で次第にその姿を現わし始める。それは何も要求されない特殊な環境と一週間後に迫った死期とが、彼女を＜他者＞の制約から解放したためである。はじめは小さな好奇心から、徐々に抑えていた感情を表出するにつれて、彼女は自分の内に眠っていた大きな力の存在に気づく。ベロニカは感情に従って自由に行動できるようになり、遂には子どもの頃に捨て去った自分の本当の望みを思い出す。

この物語でコエーリョが語ろうとしているのは、病としての狂気ではない。実際作中にはベロニカの他に何人もの「患者」が登場するが、そのうちの誰一人として病気であるようには見えない。あえて言うならば彼らは、社会の中で普通に生きることを拒んだ人々である。

ベロニカの変貌を見て生への欲望を取り戻すマリーは、精神病院も結局は外の世界と変わらないと気づく。院内にも他人の目を気にし、皆と同じ行動を選んで安心している人々がいて、彼女もその一人だったからである。

社会にあっては他人と異なる言動は時として危険視され、迫害されることすらある。しかし作者は『ベロニカ』において、それを裏返す。すなわち常に他人と同じ言動を選ぶことが、どれほど人生にとって危険であるかを彼は問うのである。それは、ベロニカが人生をどれほど損ねてきたかを見れば瞭然であろう。

ベロニカがたまたま耳にする道化の話は印象的だ。それは＜生き直し＞の知恵である。そもそも人間は一人ひとり全く異なるのだから、道化のように賢く「人の注意を惹かずに[57]」
12 狂う術を身につける必要があるというのがその主旨だが、賢く狂うためには、まず自分の望みを知らなければならない。ベロニカはそれを知らなかったので、自殺という愚かな狂気に走ってしまったのである。

また、この作品の隠れたテーマが家族関係であることも指摘しておきたい。ベロニカとエドアードという二人の若者は、どちらも親によって夢を否定され、自分の人生から遠ざかっていった。親の愛が子を束縛することがあるという事実に対して、作者は注意を促すと同時に、自身の経験を読者と分かち合おうとしている[58]。

『悪魔とプリン嬢』では、物語の舞台は過疎の進む小さな町ヴィスコスへと移る。そこは閉鎖的ではあるが紛れもなく一つの社会であり、人々は穏やかに日々の暮らしを営んでいる。しかし、その町へコエーリョは悪魔を送り込んで、純朴な人々の心に潜むものを暴き出す。

『プリン嬢』の悪魔は金（実際には金塊）である。異邦人がもたらす非常識な提案は、金の力によって、ヴィスコスの人々の心を惑わし決断を強制する。

主人公のシャンタールは冒険心や憧れを胸に抱きながらも、異邦人と出会うまではその実現を信じていなかった。ところが巨額の金が手に入るかもしれないという状況に直面して、彼女の夢は突如として現実味を帯びる。彼女は自分がヴィスコスで漫然と暮らす日々に満足していたことに気づく。また自分は他の人と違うと思っていたのに、チャンスを前に行動できず、見下していた人々と同じ臆病さを自分の内に認めて愕然とする。

町の人々も同様である。変化の可能性を知ると、彼らはそれぞれの胸中に隠されていた望みと諦めを発見する[59]。彼らはそれまでの善良でまじめな生活に物足りなさを覚え始め、そのような状況を引き起こしたシャンタールへの憎しみが噴出する。この彼女に対する感情も実は長く慎重に抑えられてきたものである。

シャンタールは町の人々の態度に一度は激昂するが、そのことで自分がいかに彼らの愛を欲していたか気づく。更に、その愛を得ようとして自分がどれほど多くのことを諦めてきたかも知るのである。彼女は自分の人生の深層に触れることで、町の人々にも共感できるようになってゆく。

シャンタールの意識変化で最も重要なのは、この他者に対する理解であろう。彼女は町の人々がそれぞれに異なる望み、異なる苦しみを生きているのを見る。そして各人の人生に敬意を抱く。それは同時に自分自身に対して敬意を抱くことを意味し、彼女は決然と自分の道を選べるまでに成長を遂げる。

一方、人間の本性が悪であるかを問う異邦人の提案は、人々の心に更に邪悪なものを呼び覚ます。彼らは老女ベルタの殺害を計画し、それを実行しようとするのである。

善と悪というテーマは、宗教にも深く関わる。ヴィスコスにはキリスト教の教会があり神父もいるが、実際にその土地を支配しているのは古代ケルト人の伝統と町の再建者アハブの伝説である。特にアハブの存在感は絶大である。

アハブはヴィスコス繁栄の基盤を築いた人物で、人間の本性を知り尽くしていたとされる。彼は荒くれ者たちの恐怖心を刺戟して秩序を維持しながら、彼らが罪悪感で人生を損なわないよう独自の「許しの日[60]」を設けた。それは一年に一度、人々が自分の罪を反省し、同時に神の罪（自分に降りかかった不運）を責めて、互いに許し合うという祝日である。彼のユニークな発想は人間を善悪に分断せず、人生に活力と推進力を生み出して、神と人間の和解を図ろうとするものである。そこからは、力を宗教に引き渡すことなく、あくまでも人間の側にそれを持たせようという作者の意図が窺える。

ヴィスコスの町を滅ぼしかけた異邦人の問いは、結局アハブの物語でもって返答されている。あらゆる人間の心を善と悪は去来する。それは聖人も悪人も同様だが、両者が異なるのは行動においてである。ヴィスコスの人々は恐ろしい悪を行いかけたが、彼らが大きな善を行うこともちろん可能である。それらは共に隠された可能性であり、何を実現するかは一人ひとりの意志と決断にかかっている。作者が示そうとしたのは、いずれを選ぶにしても人間には力があるということである。思想にも宗教にも頼らずに自分の生を見据えたアハブは、そのことを自覚して見事な＜生き直し＞を果たした一つのモデルであり、シャンタールもま

13

たそうである。

『11分間』は、『アルケミスト』に非常に近い構造を持つ物語である。どちらも主人公は故郷を後にして冒険の旅に出、海を越えて、異国の言葉を学び、困難を乗り越えながら夢へと近づいてゆく。マリアは、周囲から何かを学び取る観察眼や向上心が強い点でもサンチアゴと共通している。二人が異なるのは、彼女が成人している（22歳）という点である。彼女は基本的に＜大人＞で、より強く自分の過去と取り巻く社会を意識している。

コエーリョはこの“小説版『アルケミスト』”で、自分の望みを追求し力や知恵へと至るための最も重要な資質を二つ、マリアに与えている。

一つは前進し続ける意志である。マリアは人生の早い時期に恋愛において失敗を経験している。それは相手からの働きかけに対して臆病になってしまった経験である。それを痛切に悔いている彼女は、決断を下す時には「戻って来ることはいつでもできる、でもこんなに遠くへ行くチャンスはいつもあるわけではない[61]」と言い聞かせて自分を鼓舞し、思い切った行動をとる。頼れる人の誰もいない環境が彼女の内に自律心を生み出し、日記をつける習慣によって彼女の内的成長は促されてゆく。

もう一つの資質は率直さである。マリアは『ベロニカ』の主人公同様、人の目を気にする傾向が強かったが、娼婦となってからある種の開き直りを見せる。彼女は知らないことがあれば堂々と人に質問し、自分の素性や望みについても正直に話すようになる。

主人公がこのようにありのままの自分を曝け出して前進してゆくと、どのようなことが起こるか。それこそが、この小説で作者が描きたかったことの一つであろう。世界は、その真の姿を彼女の前に現わし始めるのである。マリアが質問をすると、実は聞かれた相手も同様に無知であったことが判明する。自分のことを隠さずに話すと、離れていく人もあるが、彼女にとって本当に必要な人々が彼女を見出し始める。そのように、少しずつではあるが隠されていたものが彼女の前に開示されてゆく。

それは彼女自身についても同じである。マリアが娼婦になる決心を固める時に出現する見えない女は、彼女の理想像であると考えられるが、この時点で二人は別の人格として対話している。それがラルフによって光として知覚され、マリアが愛を受容してゆくにつれて、彼女の日記には知恵の言葉が増えてゆく。そしてラルフと過ごす初めての夜に、マリアはこの「光と知恵と経験と魅力に満ちた[62]」女性と一体化する。それは彼女の最良の部分が発現したことを意味する。

『11分間』の大きなテーマは性である。しかし作者はそれを特別視せず、あくまで生きることにおける行為の一つとして見ている。彼が指摘するのは、それが特別視されることによって歪められてきた歴史である。マリアという一人の娼婦を通して、作者は性に関する＜偽りの物語＞がどれほど多くのことを損ねているかを暴く。多くの男性が女性を怖れており、
14 女性も人に相談できない悩みを抱えている。その大半は他人と自分が違うことへの怖れに根ざしている。その怖れのために人々は性について率直に話すことができず、その本当の豊かさは依然隠されたままである。作者は改めて、性においても人間は多様であり、一人ひとりが全く異なる望みを持っていることを明確な筆致で描き出している。

ところで、マリアが娼婦であることを考える時、もう一つ問題となるのが性と金の関係である。彼女が国を出る際に母親の口から出た「お金は何でも買える[63]」という言葉は印象的である。『11分間』は、金がすべてを正当化できるかという問いに対する答えとして読む

こともできよう。

作中マリアにとって最も大きな気づきの瞬間は、娼婦であることを「大嫌いだ(64)」と日記に書きつけた時である。その時マリアは、金がすべてを正当化するという物語が偽りであると確信する。それは答えとしては陳腐かもしれないが、重要なのはマリアがその時初めてそう断言できたことである。ラルフとの心の交流を経験するまで彼女を支えてきたのは、金であった。彼女は稼いだ金と異国での経験を持って故郷に凱旋することを唯一の目標としてきたからである。その目的意識が彼女を強くし、世界の虚飾を剥いで彼女に知恵を与えてきた。マリアはあまりに多くの偽りを見てきたが、その果てに偽りでない愛の存在を知る。それは彼女が夢に見ていたものであり、信じたくても信じられずにいたものであった。

結論

パウロ・コエーリョの最も大きな仕事は“暴く”ことである。彼は、人が無条件に信じているものの中に偽りがあることを暴くために、それに気づく人々の物語を丁寧に紡いでゆく。暴かれるのは善いものや美しいものばかりではない。ヴィスコスの人々の心に宿ったような悪いものや醜いものもある。

コエーリョの物語は読者に夢を追うことを強制しはしない。それは、人生が自分の望みを生きるためのものであることを静かに語りかけてはくるが、同時に自分の望みから離れている人々をも温かい眼差しで共感を持って描いている。人にはその人なりの事情やペースのあることを、コエーリョはよく承知している。

彼が偽りを暴く目的は、人々に力を返すことである。誰もが生きることを自分の手に取り戻せるように、コエーリョは<生き直し>への具体的な扉を一つ一つ、開いているのである。

【引用・参考文献】

※文献挙示の方式は、中村健一『論文執筆ルールブック』日本エディタースクール出版部、1988年に準じている。

(1)　これらのデータはパウロ・コエーリョと独占契約を結ぶSant Jordi Asociadosのホームページ上で公表されている数字である。
“:: Sant Jordi Asociados ::”、インターネット、http://www.santjordi-asociados.com/biography.htm（2008/1/13にアクセス）、http://www.santjordi-asociados.com/titles/editions.htm?2#zahir（同上）。

(2)　経歴についてもインターネット上の情報に多くを負っている。
前掲のホームページから“:: Sant Jordi Asociados ::”、インターネット、http://www.santjordi-asociados.com/biography.htm（2008/1/13にアクセス）。
またパウロ・コエーリョの公式ホームページからは、“Site Paulo Coelho”、インターネット、http://www.paulocoelho.com.br/engl/（2008/1/13にアクセス）、http://www.paulocoelho.com.br/engl/dow/Bio.pdf（同上）。
更に信頼性の高い情報源としてJuan Arias, PAULO COELHO: Confessions of a Pilgrim, Trans. Anne McLean, London, Harper Collins Publishers, 2001を参考にした。
これらの間には幾つかの齟齬が見られたため、特に作家活動を始める前の出来事については年代を詳述しなかった。現在フェルナンド・モライスが初めてコエーリョの本格的な伝記を執筆しているとのこと

15

だが、その出版（2009年予定）が待たれる。

(3) ブラジルのミュージシャンであり音楽プロデューサー。コエーリョとは同い年で、当時はCBSレコードで製作に携わっていた。

(4) 実際には86年以前にも何冊かの著作があるが、いずれも絶版となっており、作者もそれらを自分の著作リストから外している。

(5) 「短編集」と一括りにしたが、その中には彼の書いた様々な記事を一冊に再構成したものもあれば、童話集も含まれる。

(6) 彼の作品には各地の伝説や物語、思想や知恵の言葉が随所にちりばめられている。世界中を旅するコエーリョは、それらの中に一貫して根源的なものが流れているのを感得しているに違いない。また彼の作品に母国ブラジルが登場することは少ないが、創作のほとんどがリオ・デ・ジャネイロの自宅で行われてきたことなどを考えると、彼がブラジルをルーツとして強く意識していることが分かる。

(7) Juan Arias, Op. cit., p.2　なお本論文中における外国語文献からの引用はすべて私訳である。

(8) 原語版はこのタイトル（『ある魔術師の日記』の意）だが、英語への翻訳時には作者本人も関わって“The Pilgrimage”と改題されている。日本語版のタイトルもこれに基づく。

(9) 『第五の山』までの日本語版（4作）は英語版からの重訳である。

(10) 出版社・出版年は初版について示している。ちなみに日本国内での出版権は現在、角川書店が有している。

(11) 主に内省を促し直感を養うことを目的とした心身両面のトレーニングである。

(12) これはパウロ・コエーリョを研究する上で最も重要なテーマの一つである。彼はブラジルを「世界一magicalな国」（Juan Arias, Op. cit., p.xii）と呼んでいる。人種や宗教のみならず聖俗あらゆるものが混淆して息づき、精霊を信じていても恥ずことなく公言できるというその風土が、彼の創作の土壌となっている。

(13) 前掲のホームページに拠る。“:: Sant Jordi Asociados ::”、インターネット、http://www.santjordi-asociados.com/titles/editions.htm?6#alchemist（2008/1/13にアクセス）、http://www.santjordi-asociados.com/titles/news.htm?6#alchemist（同上）。

(14) 2006年にポルトガル語版が再出版され、英語版も2008年に復刻予定である。

(15) 『星の巡礼』では妻の名は出てこなかった。

(16) 日本では「ワルキューレ」の名の方が有名だが、北欧神話において戦士を死へ、そしてその先の天国へと導く乙女たち。本作では、モハーヴェ砂漠を何度も横断しながら各地で集会を行い、天使に倣い善悪を超越した言動で人々にメッセージを伝え歩く女性たちのグループである。

(17) 作中で用いられる“hunter”と“farmer”の分類は、コエーリョの登場人物たちを理解する際の大きな助けとなるが、本論文では紙面の都合上触れない。

(18) 彼らが砂漠に滞在する40日という期間は、イエスの荒野での修行を念頭に置いていると考えられる。

(19) 以降『ピエドラ』と略称する。

(20) Paulo Coelho, Na margem do rio Piedra eu sentei e chorei, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.29

16 (21) Ibid., p.42

(22) イスラエルの民がバビロン捕囚の憂き目に遭い、約束の地への思いを歌ったもの。

(23) 一度は修道院長がピラールに第1－2節のみ示して、彼女の踏み込もうとしている苦難が長く続くだろうことを伝えている。もう一度はピラールとの暮らしを選んだ幼なじみが、その先の第6－7節（エルサレムへの思いを高らかに宣言する箇所）を引いて、そこに希望を見出そうとしている。

(24) 以降『ベロニカ』と略称する。

(25) 出版権の移転に伴って訳者が変わり、初めてポルトガル語からの翻訳が実現した。

(26) 以降『プリン嬢』と略称する。

(27) 再び訳者が変わった。新しい訳者はコエーリョが敬愛するボルヘスの翻訳を手掛けたことがある。

(28) その顛末では男性性と女性性との関係が象徴的に語られているが、本論文のテーマから離れるのでここでは触れない。

(29) その点から見ると、マリアがスイスへ渡ってからの物語は、主人公が故郷を去るところで終わった『プリン嬢』を引き継いでいると考えられるかもしれない。

(30) Juan Arias, Op. cit., p.122

(31) Ibid., loc. cit.

(32) Ibid., loc. cit.

(33) 本論文中では、通常と異なる意味を語に賦与する際に＜＞を用いることとする。

(34) 知恵のある老人メルキゼデックの言葉。Paulo Coelho, O Alquimista, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.38

(35) Juan Arias, Op. cit., p.166　このような言及にはユング派の心理学の影響を見ることができる。コエーリョ自身もそのことを認めている。

(36) Paulo Coelho, O Diário de um Mago, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.47

(37) Ibid., p.28

(38) Paulo Coelho, O Alquimista, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.38

(39) Ibid., p.149

(40) Ibid., loc. cit.

(41) Ibid., loc. cit.

(42) Ibid., p.148

(43) 共にJuan Arias, Op. cit., p.93

(44) Ibid., loc. cit.

(45) “女性性”はコエーリョの主要なテーマの一つであるが、前述の通り本論文においては“Brida”の分析はできない。神の女性性については次節で論じる。

(46) コエーリョは妻クリスチーナ・オイティシカと共に実際にモハーヴェ砂漠を横断した経験を持つ。彼がこの旅を行ったのは師が彼にそれを課したからであり、その意味でこの旅は彼にとって先行する二回の巡礼行と同等の重要性を持つと考えられる。

(47) とはいえコエーリョは、テーマを語るのに登場人物を役割として利用するようなことは決してしない。彼はあくまでも一人ひとりの人間に寄り添い、作品においてはその個性を丁寧に描き出そうと腐心している。

(48)『ピエドラ』はその意味で、コエーリョ作品において記念碑的な位置を占めている。しかも、そこでは彼の創作の才が伸びやかに発揮されており、かつテーマと物語との融合が見事に実現していて、この作品を彼の最高傑作の一つへと押し上げている。

(49) Paulo Coelho, Na margem do rio Piedra eu sentei e chorei, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.90 17

(50) Ibid., p.181

(51) Ibid., pp.125f

(52) Paulo Coelho, O Alquimista, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.38

(53) パウロ・コエーリョ『ベロニカは死ぬことにした』江口研一訳、角川書店＜文庫＞、2005年、p.84。

(54) Ibid., loc. cit.

(55) Ibid., loc. cit.

(56) そのような意識の変容が現代社会においてどれほど難しいかは、二人の変化が非日常的な出来事（愛あるいは死）によって初めて実現していることからも看取できる。そしてコエーリョの創作が狙っているのも、まさに読者の日常のベールを剥ぐことに他ならない。

(57) パウロ・コエーリョ『ベロニカは死ぬことにした』江口研一訳、角川書店＜文庫＞、2005年、p.124。

(58) 作中はじめ多くの場面で作者はそのことを認めている。本書の出版後、同様の経験を持つ読者から大きな反響があったそうである。

(59) ヴィスコスに子どもが一人もいないのは象徴的である。そこでは誰も全力で夢を追求してこなかったことが分かる。また異邦人についても、事故を生き延びるはずであった娘（＜子ども＞）を失ったために、長い苦悶へと迷い込むこととなる。その点で彼は『第五の山』のエリヤと好対照をなしている。

(60) Paulo Coelho, O Demônio e a Srta. Prym, São Paulo, Editora Planeta do Brasil, 2006, p.117

(61) Paulo Coelho, Onze Minutos, Rio de Janeiro, Editora Rocco, 2005, p.37

(62) Ibid., p.130

(63) Ibid., p.40

(64) Ibid., p.207

（受理　平成20年1月15日）